

『お面』

高橋
康太

【あらすじ】

高校生になった相模よよ（15）は、憧れていたアルバイトを始めることに。ところが、社会で働く大人たちは自分が思っているほど立派ではなく、そのギャップにショックを受ける。そんな中、父親の会社で『仕事参観』なる職場見学が実施されることになって……。

【特記事項】

女子高生の主人公よよが、父親の仕事見学を通して、大人には色々な顔があることを知る物語です。思春期の彼女には、それが「お面」がたくさんあるように見えるのでタイトルにしました。

【文字数】

5512文字

【本編】

○相模家・ダイニング

カップ麺をすする相模よよ（15）と相

模依子（46）。

よよ「お母さん、お父さんいないといつつも
カップ麺だよね」

依子「卵も野菜ものせてるでしょ」

よよ「カットキャベツじゃん。お父さんにも
食べさせればいいのに」

依子「本部長には食べさせられないでしょうよ」

よよ「あ」

麺をすするのを途中でやめるよよ。

よよ「14日学校休んでもいいか先生に聞け
なかった。先生、子供の授業参観でいなか
ったから」

依子「あら。うちと偶然同じ」

よよ、箸で依子をさしながら、

よよ「同じじゃないけどね。先生が行く側だ
し。ってか、普通そう」

構わず麺をすする依子。

依子「まだ行きたくないって言ってるの？」

よよ「別に行きたくないわけじゃないって。

ただ――」

玄関がガチャリと開く音。

カップ麺を冗談っぽく手で隠す依子。

明紀「ただいまぁー」

酔っぱらって赤い顔の相模明紀(47)

が帰ってくる。依子、廊下にいる明紀に駆け寄り、

依子「早かったねー。言ってくれば迎えに行っただのに」

明紀、上着を脱ぎながら。

明紀「いいよ、歩いてビール飲まなかったことにするんだから」

依子「まだ9時だよ？ 今日はお父さん主演

だったんじゃないの？」

依子に言われて力なく笑う明紀。

明紀「本部長就任祝いとか言うけどさ、理由をつけて飲みたいだけだよ」

よよ、ダイニングに入ってくる明紀に

向かって。

よよ「おかえり」

明紀「ただいま。美味そうなの食ってるな」

よよ「お母さんもさっきまで食べてたよ」

明紀「お父さんも食べたいな」

依子「はい。準備しておきます」

おどけて喋る依子に笑う明紀。

明紀「じゃあ着替えてくる」

明紀、ダイニングを出ようとして足を

止める。

明紀「14日、無理してこなくていいからな」

よよ「……なんで？」

明紀「学校も休まなきゃいけないし。それに

……恥ずかしいから」

よよ「恥ずかしいから顔赤いの」

ふざけて逃げるように階段を上る明紀。

よよと依子、小声で。

よよ「聞いてたのかな？」

依子「さあ、たまたまでしょ」

よよ「うーん？」

曖昧な相槌でごまかすよよ。

○ファミリーレストラン・ホール(昼)

ホールの端で、バイト中にもかかわらず暇を持て余しお喋りをするよよと上

原楓(15)。

楓「仕事参観かぁ」

呟く楓。よよ、小さく頷く。

楓「社会科見学とは違うの？」

よよ「……うん。なんか……仕事参観？」

楓「ふつー、親が子供の学校に授業参観に来るのね。その逆バージョンか。うちが知らないだけで今流行ってんのかな」

よよ「他の会社はわかんないけど、今年から始まったんだって」

楓「まって、それ学校休めんじゃん！」

突然目を丸くして大きな声を出す楓。

田近「ちよっと！それ今やる仕事っすか！？」

突然、厨房から店長の田近(34)の怒号。よよと楓、慣れた仕草で振り返る。

従業員の斎藤（44）が怒られている。

田近「……毎日毎日、部下の指導も仕事のうちだけどさ、ここまではさすがに給料に含まれてないって」

斎藤「すみません……」

よよと楓、元の体勢に戻って。

楓「なんであのオジサン辞めないんだろうね」

よよ「家族もいるから簡単に辞めれないとか」

楓「家族いんの？」

よよ「うん。うちらと同世代の子供いるって」

楓「子供いるようにみえねー。てかさ、よよ

のパパも会社で怒られてたらどうする？」

と、無邪気な楓。対して、口をとがら

せてうつむくよよ。冗談のつもりがあ

まりの温度差に戸惑った楓、

楓「あ、ごめん。ほんとに怒られてた？」

首を振るよよ。

よよ「……会社のことなんてわかんない。で

も、ここではお父さんくらいのオジサンが

実際怒られてるし」

楓「見てらんないよね。あ、もしかしてそれで仕事参観行くの迷ってる感じ？」

よよ「別にそういうわけじゃないけど……」

楓「嫌だったら行かなきゃいいじゃん。飲み会いこーよ。店長とまた話せるよ」

よよ「……」

楓「よよだって店長イケメンだって言ってたじゃん」

よよ「まあ、最初の頃は……」

楓「顔なんか変わってないじゃん」

よよ、怒っている田近を見ながら。

よよ「なんか怖くない？ お客さんとしてきたときはそんなことなかったんだけど。今だってほらずっと怒ってるし」

楓「それはオジサンが悪いんじゃない」

よよ「食事会の時だって、普段と全然違ったり。お酒めっちゃ勧めてきたり下ネタ言ったり、顔赤くしてテンション高くて」

よよ、聞こえないくらいの小声で、

よよ「猿みたいだった」

よよの声がうまく聞き取れず、

楓「え？」

と聞き返す楓。それと同時に店のドアが開く。サラリーマン風の男と制服姿の花(15)が入店。よよと楓、顔を見合わせて肘を小突きあう。

楓「いらっしやいませー。(小声で)きたきた」

よよ「どっち行く？」

楓「うちいく」

注文を取りに行く楓。戻ってきて、

楓「モンブランパフェお願いしまーす」

田近の怒号がやむ。

よよ「もしかして……」

楓「うん。今日のモンブランパフェであの子

全種類制覇だよ」

よよ・楓「いえーい」

小さく手を合わせる二人。

よよと楓、男と女子高生が楽しそうに喋っている様子を遠巻きに眺めながら。

楓「あの子、東高校だよね？ 頭良くてもパ

パ活すんだね」

よよ「このお店でいくら搾り取ったんだろう」

楓「店長言ってたけど、平日の真昼間も来るらしいから学校も行っていないよ」

よよ「てゆうことはあっちのおじさんも仕事行っていないのかな。でもスーツだよね」

楓「仕事行くふりしてここ来てんじゃね？」

よよ「えー、それ最悪。大人としてどうなの」

斎藤「お願いします」

厨房から注文商品ができた合図。

よよ「次私行きたい」

商品を持って客の元へ行くよよ。

ふいに男に父親の影を重ねてしまうよ

よ。一瞬立ち止まるも。

よよ「ごゆっくりどうぞ」

楓の元へ戻る。

よよ「……楓さ、さっき見えねーって言った

じゃん？ オジサンが親に」

楓「言っただけど？」

よよ「見えないってことはさ、多分うちのら

中で大人とかお父さんは怒られたりしない
生き物って認識があるってことじゃん？」

楓、首をかしげながら。

楓「あー、確かに？」

よよ、もごもごと言い淀んで。

よよ「なんか……お父さんは家のお父さんの
まままでいてほしい……」

楓「パパのこと大好きなんだねえ」

意地悪そうに笑う楓。

よよ「違う違う！　ないない！」

必死に否定するよよ。

楓「でも普段と違う顔を見て幻滅するのが怖
いってことでしょ？　それって普段がよっ
ぽど良くないと成り立たなくね？」

よよ「アイドルじゃないんだから……」

唇をとんがらせるよよ。

再びお店の入口が開く。本田（42）入

店。席にはつかず、

本田「お疲れ様」

よよ・楓「……お疲れ様です」

挨拶してよよと楓の横を素通りし厨房に顔を出す。怒っていた田近。途端に態度を変え、本田に近づいてくる。

田近「あー、本田さんお世話になってます」

田近、よよと楓を見て。

田近「ほら、皆も挨拶して。本社の本田さん」
愛想よく挨拶を促す。

本田「いいよいよ。バイトさん？ 僕じゃなくてお客様の相手をして差し上げて」

ホールを掌で示す本田。お客さんがちやうど入店。

本田「私が用事あるのは店長なので」

本田の顔つき変わる。田近の背筋も伸びる。よよと楓、ホールへ出て接客。

接客しながら合間に通路で合流するよよと楓。

よよ「本社の人初めて見たね。なんだろうね？」
不機嫌そうな顔をして返事をしない楓。

よよ「楓？」

楓「……そういえば店長言ってた。本社の人

間が厳しくてうるさいって」

よよ「そうなの？」

楓「さつき、近く通った時間こえた。めっちゃ怒られてた」

よよ、田近を見る。遠目で見ても、本田が頭を下げて謝っているのが分かる。

楓、ぶっきらぼうに。

楓「ふつーに冷めたんですけど」

よよ「え」

楓「ふつーに蛙化だわ。最悪」

不機嫌そうに歩いていく楓。追いかけるよよ。

よよ「で、でしょ！？　そうなるでしょ！？」
心なしか嬉しそうなよよ。

○株式会社インパクト・社内・エントランス

お洒落な大人たちが行き交う社内。

案内役の社員に誘導されて歩く仕事参観に来た家族たち。

落ち着かない様子で辺りを見回すよよ。

○同・大ホール

壇上で講演をする社員。後方で見学する家族たちの姿。

案内役「こちらは講演やセミナーで使用される社内で一番大きい場所になります」

案内役のアナウンスに小さく頷くよよ。

○同・カスタマー室

透明ガラス越しにコールセンターで電話対応をする社員たち。

案内役「こちらはカスタマーセンターです」

一行、室内に入室。飛び交う言葉の応酬に圧倒される家族たち。

社員「――申し訳ありませんでした！」

謝罪の声が聞こえて、よよ、そちらを振り向く。電話越しに頭を下げている社員を見つけ不安げに見つめるよよ。

○同・控室

案内役「それではプレゼン会議の時間まで

少々お待ちください」

案内役に促され、控室で談笑する家族

たち。椅子に座るよよと依子。

依子「次だね、お父さんの出番」

緊張の面持ちで頷くよよ。

2人組の女性が近づいてくる。

女性「相模さん、お世話になってます」

依子とよよ、立ち上がって挨拶。

世間話が続ける依子たちの傍らで所在

なさげなよよ。ふと、部屋の隅を見る。

よよ「あ」

視線の先には花の姿。よよの視線に気

がついた花、よよに駆け寄る。

花「あの……ファミレスの店員さんですよ」

よよ、困惑しながら。

よよ「そうですけど……」

よよ、花に掌を差し出して。

よよ「いつも来てくれる……すごい偶然」

ほっとした表情の花。

花「私もびっくりしました。もしかして思
って。急に話しかけてごめんなさい」

よよ「ああ……いえいえ」

花「……」

よよ「……」

花「あ……高校生意外といたいですよね」

辺りを見回す花。

よよ「そう……ですよね。何年生ですか？」

花「1年です」

よよ「あ、同じ」

微笑を浮かべる二人。気まずくて落ち

着かないよよ。必死に話題を探す。

よよ「あ、これ見た？パンフレット」

手元の会社案内を掲げるよよ。

花「うん。見たけどすごい難しいよね」

よよ「横文字多すぎて意味わかんない」

花「なんか、そんなところで当たり前前に働い

てるパパって実はすごいんだなって思った」

よよ「(呟くように)パパ……」

意味ありげに小さく頷くよよ。

花「どうしたの？」

よよ「あ、えーと、お父さんのこともう見た？」

花「うん。カスタマーセンターにいたよ」

よよ「そうなんだ」

花「気づかなかった？」

よよ「え？　気づかなかったというか、そも

そもあなたのお父さんの顔知らないし……」

花「そっか、そうだよね。お客さんたくさん

いるしいちいち覚えてないよね」

よよ「お客さん？」

花「ファミレス。いつも私パパと一緒にでしょ？」

固まるよよ。

よよ「え！？」

大きな声を出して口を押えるよよ。

よよ「え！？　お父さん！？　パパってお父

さん！？　お父さんってパパ！？」

不思議そうな顔の花。

花「パパとお父さんは同じじゃないの……？」

よよ「あ……そうじゃなくて、いや、そうなら
んだけど」

よよ、言葉を選びながら、

よよ「一緒にパフェを食べてた人はお父さん
で、しかもこの会社で働いてるってこと？」

頷く花。

よよ「そうだったんだ……」

花、少し笑って。

花「不思議に思ってるよね」

よよ「え？」

花「平日も一緒にいるしパパ働いてないって
思われても仕方ないなって」

よよ、何とかごまかそうと、

よよ「まあ……？」

と曖昧な相槌。

花「私ね学校行ってないんだ」

よよ「……」

花「平日にお店行ってるから気づくよね」

笑う花。小さく頷くよよ。

花「……パパがね、甘いもの全部食べてみよ
うって。そしたら嫌なこと全部忘れるって」

よよ「あ……そういうことか……」

小さく声にだして納得するよよ。

花「うちママいないから。パパが休み取って付き合ってくれてるんだ。もしかしたら自分が食べただけかもしれないけど」

よよ、どう反応したらよいか分からず
愛想笑い。花、それを見てハツとする。

花「ごめんね、自分のことばかり」

扉が開いて案内役の社員が入室。

案内役「お待たせしました。移動します」

案内に従ってぞろぞろと動き出す家族。

花「久しぶりに同い年の人と話せて楽しかった。ありがとう」

遠慮がちな笑顔で小さく会釈しながら、

先に部屋を出ていく花。

よよ、その背中に向かって、

よよ「……なんか、ごめん」
と呟く。

○同・会議室

ガラス張りの廊下から覗く大きな部屋。

中央の楢円テーブルに座る役員たち。

続々と部屋に入る社員の家族たち。

プロシエクターの前に明紀登場。

肘で小突きあうよよと依子。

明紀「それでは本日のアジェンダから――」

プレゼンを始める明紀。

依子「別人だね」

依子、よよに小声で話しかける。反応

せず明紀をただ見つめているよよ。

Mよよ「――そこには、いつもより真剣な顔のお父さんがいた。家では見たことがなかった表情のお父さんが。――大人にはいろんな顔がある。だまし絵みたいに見る角度によって本部長に見えたりお父さんに見えたり。子供には見えない絵が隠されていることだってある……かもしれない。ちゃんとしてる顔、怒ってる顔、怒られてる顔、どれが本物かはわからないけど、たくさんあつて当たり前なのかも。大人っていろんな人とかかわりあいながら生きていかなき

やいけないから」

プロジェクターの画面が暗くなる。

明紀「――以上になります。ありがとうございます
いました」

明紀、礼をしてプレゼン終える。

拍手の中、席に戻る明紀。椅子に座り
顔は正面に向けたまま、よよに向かっ
て胸の前で小さく親指を立てる。

よよ「あ」

気づくよよ。吹き出しながら依子に、

よよ「お父さん、グーってやってた。小さく」

依子「ほんと？ 気づかなかった」

何事もなかったかのように座る明紀。

明紀を微笑んで見つめるよよ。

Mよよ「――でも、それだけたくさんの顔が
ある中で、父親の顔を知っているのは私た
ち家族だけ。それは、私の特権だ」

目が合うよよと明紀。よよ、微笑を浮
かべ、お腹の前で小さく親指を立てる。

(了)